

成果報告書

記入日 2014年 10月 31日

氏名 吉澤あすな	留学先国名 フィリピン共和国	所属機関 Xavier 大学・ミンダナオ文化研究所
研究テーマ：南部フィリピンにおける宗教・民族境界の再考		
留学期間： 2012年 9月～ 2014年 8月		
<p>1. 概要</p> <p>冷戦の崩壊後、経済イデオロギーに代わる集団の対立軸として、宗教・民族・文化的な差異が注目されるようになった。南部フィリピンにおいては、1970年代以降イスラム教徒（ムスリム）が中心となった分離独立運動が展開されてきた。同地域におけるムスリムとキリスト教徒（クリスチャン）の関係を対象とした先行研究は主に、両者の対立関係を説明する研究と、連帯・友好関係を強調する研究に分けられる。本研究の目的は、南部フィリピンにおけるムスリムとクリスチャンの関係を、家族として生きる切実な現実の中で、多様で可変的な関係として描き直すこと、更には、米西植民地体制、自治分離運動に伴う民族ナショナリズムの興隆、宗教復興運動といった作用によって構築されてきた南部フィリピンの宗教／民族集団の境界と差異を、一般庶民の視点から捉えることである。そのために、南部フィリピンの地方都市において、2年間の現地調査を行った。</p> <p>2. 調査によって得られた成果</p> <p>①「ムスリム」と「クリスチャン」を取り巻く多様な関係性 —インターマリッジの事例から</p> <p>家族関係における宗教と民族の差異を考察するために、ムスリムとクリスチャンの間の結婚（インターマリッジ）についての調査を行った。調査方法は以下のとおりである。(i)20組の夫婦に対する、結婚に至る経緯や結婚後の生活に関する聞き取り調査を行った。(ii)結婚式や宗教行事の場に同席し、儀礼行事においてどのような折衷案が為されているかを観察した。(iii)インターマリッジ家族と日常生活を共にし、日々の生活において宗教や民族の差異がどのような場面で表出し、またその解決が為されるのかを調査した。</p> <p>(i)結婚の障害</p> <p>出会いから、結婚までの過程で「障害、問題はあったのか」という質問に対して、女性親や親戚の反対をあげた回答者は8人であった。「家族に反対されたままムスリム婚をして夫の家族と一緒に住んだ。子どもを生んでしばらく帰らなかった[30代主婦]」「祖父が最後まで結婚に反対したために結婚式が遅れた[60代高校教員]」「子どもたちはしばらく反対していたけれど、彼の人格を知ると納得して認めてくれた[50代食堂経営]」</p> <p>家族に反対される場合も存在する一方、反対のないケースも多いことが判明した。しかも、子どもが生まれた後現在まで女性の家族との関係が引き続き悪いという語りは、どの回答者からも得られなかった。</p>		

夫の家族との関係において、特に問題があると答えた回答者は1人であった。「マラナオ（ムスリムの民族集団）の人たちは所有の考え方が違うから私の枕とか勝手に使われる。家に泊まりに来て何も手伝わない。性格の問題ではなく文化の問題だから仕方ない[50代大学教員]」そのほかに、言語の違いをあげた回答者が3人いた。それは主に同居する中での「問題」であった。別居している場合は、配偶者家族との関係は概ね良好である。

子どもの宗教選択については揉め事があったとする回答者は1人のみであった。「私は子どもにカトリックの洗礼を受けさせたかったが、夫は嫌がった。私は、洗礼を受けると子どもにスポンサーがたくさんつく、と説明した。彼は話し合いの時に泣いていたが、やがて認めてくれた。[20代主婦]」

これらの回答から、男性がムスリム／マラナオで女性がクリスチャンの組み合わせの場合、結婚する時点では障害は大きくないといえる。つまり、女性家族からの反対は、ムスリムへのネガティブ・イメージに起因するものであり、夫の人格を知るにつれ後に承認に至っている。さらに、男性家族からはクリスチャン女性は、「嫁」として受け入れられており、非マラナオであるために排除された経験を聞くことはなかった。さらに、クリスチャンの妻は、マラナオに「同化」しなくてはいけないわけではない。結婚当初は夫家族と同居する例が半数以上であるが、現在同居しているのは1人のみである。別居、自分や子どもの宗教選択といった方法で、適切な距離を保っている。

(ii) 妻の信仰の変容

調査対象者となったカップルは、全組女性が（元）クリスチャン、男性がムスリムの組み合わせであった。20組中半数の妻が調査時点でイスラームへ改宗していた。改宗した妻10人のうち、ほぼ全員が結婚後しばらく（数年から数十年）してから、イスラームの宗教実践を行うようになったと答えた。宗教実践を行うようになった契機として、「身内の病気や死」「勉強会に参加したこと」「夫や夫の家族に誘われて徐々に加わるようになった」といったことが挙げられた。その中で、注目すべき契機として「夫が2人目の妻と結婚したこと(50代 NGO スタッフ)」という回答があった。（※イスラームでは、最大4人まで妻帯が認められており、調査地のムスリム男性が2人以上の妻を持つのはそれほど珍しいことではない）彼女は、数年前に夫が2人目の妻と結婚したことを、夫の親戚から聞かされた。この女性によると、夫の親戚から「夫が他にも妻を持つことを受け入れるのはとても辛いことだ。でも、それを受け入れることによって大きな神のreward（恩寵）がある」と説得を受けたという。そのことを受け入れるまでに時間がかかったが、イスラームの勉強会に参加するようになり、教えをより深く知ることによって「そのことが起きて良かった」と思えるようになったという。

「改宗・回心」について、他の宗教やイスラーム改宗者全体と比較した際に、「一夫多妻」がその契機となり得るとするのはインターマリッジ家族の特徴であり、興味深いと考える。この事例から、キリスト教とイスラームにおける、ジェンダー観や「結婚」の意味そのものの違いが鮮明に見て取れ、その違いに起因する葛藤を個人が乗り越えるプロセスが見て取れる。今後、さらに掘り下げて考察したいトピックである。

② 「ムスリム」と「クリスチャン」の間の可変的境界線 —イスラーム改宗者の事例から

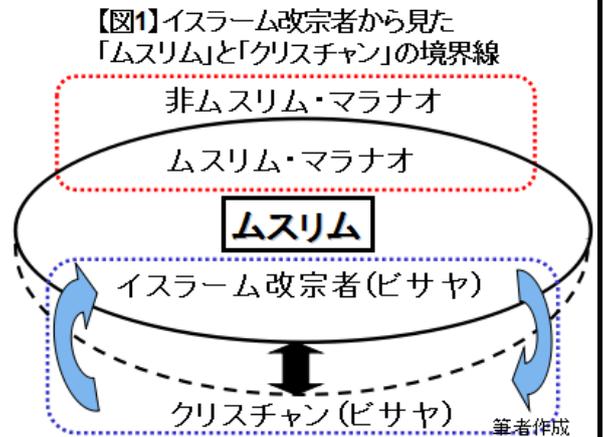
インターマリッジの調査を進める中で、元クリスチャンの妻をはじめとして、キリスト教からイスラームへ改宗した人びと（以下イスラーム改宗者）に数多く出会った。イスラーム改宗者は「クリスチャン」から「ムスリム」になることで、境界線を越境した人びとである。彼らはムスリムであるが、元クリスチャンであり、クリスチャンの友人・家族を持つことから、クリスチャンと連続した宗教観や共通の宗教的知識を保持している。彼らに着目することで、これまで固定的であるとされてきた「ムスリム」と「クリスチャン」の境界線の動態を明らかにした。

調査方法は以下のとおりである。(□) 25人のイスラーム改宗者に対して生い立ちと改宗の経緯を中心に聞き取り調査を行った。(□) イスラーム改宗者による宣教セミナーやアラビア語教室への参与観察を行い、質疑応答や説法の内容を記録した。

(□) イスラーム改宗者による儀礼行事への参与観察を行った。それによって、宗教実践の程度や方法が「ムスリム」と「クリスチャン」の差異をどのように定義付けているのかを考察した。

調査の結果、【図1】に示したような、イスラーム改宗者による宗教／民族的位置づけと、「ムスリム」と「クリスチャン」の境界線の動態が明らかとなった。具体的には以下3点にまとめられる。

(i) **宗教／民族的位置づけ:** 申請者は、イスラーム改宗者に対する聞き取り調査によって、彼らの宗教／民族的位置づけを考察した。その結果、イスラーム改宗者の多くは、クリスチャン住民の眼差しに対抗する形で自らの宗教／民族的位置づけを形成していることが明らかとなった。調査地のクリスチャン住民にとって、ムスリム住民といえばマラナオ民族の人びとであることが連想される。これに対し彼らは、「私はムスリムだがマラナオではない」と主張する。つまり、宗教帰属である「ムスリム」と民族帰属である「マラナオ」とは区別され、後者はイスラーム改宗者にとって境界線の外側に位置づけられる。



(□) **「ムスリム」と「クリスチャン」の帰属の可変性:** 申請者は、イスラーム改宗者の勉強会や家庭生活といった日常生活において、誰がクリスチャンで誰がムスリムかという宗教帰属に関する語りや、宗教帰属が問題視されているイスラーム改宗者の行動を観察した。その結果、「ムスリム」か「クリスチャン」かという属性は、信仰告白と宗教実践の有無という2つの基準に関して、他者の見做しと当人の主張の折衝の結果によって判断されることが示された。そのためイスラーム改宗者にとって、個人の宗教的属性は、その場の議論や共有される情報によって可変的となると認識されていることが明らかとなった。

(□) **「ムスリム」と「クリスチャン」の境界線の侵食:** 申請者は、イスラーム改宗者の勉強会や宣教セミナーにおいて、イスラームとキリスト教の差異がどのように解釈されているかを考察した。イスラーム改宗者は、旧・新約聖書の記述を引用して「キリストに忠実に従っているのはムスリム」であるために、「ムスリムとしての宗教実践を行うことで真のクリスチャンになれる」という説明を常套句のように使用している。この時、イスラームの正当性はキリスト教の世界観によって根拠付けられており、「クリスチャン」から「イスラーム改宗者」への移行は、「より正しい宗教実践」を選択するか否かという意味に焦点化されている。こうした語りにおいて、両者の宗教共同体としての境界線は曖昧化していることが示された。

3. 留学生活について

2年間の留学生活は、多くのことを感じ・学び、たくさんの人と出会う中で、あっという間に過ぎてしまった。留学生活において一番心に残っているのは、ホームステイ先の家族と過ごした時間である。留学して半年ほど経ってから、調査地の大学で出会った大学院生の女の子の親戚の家に住まわせてもらうことになった。彼らはイスラーム教徒のマラナオ民族の家族だった。それまで、調査地のクリスチャン住民から、「マラナオには教育がない」「態度が横柄だ」「喧嘩っぱやい」といった噂を聞いていた私は、内心おっかなびっくり、彼らと一緒に暮らし始めた。その中で、マラナオに関する様々な言説に思わず同意したくなる経験、それはやっぱり外部のイメージでしかないと判明したこと、「そう思われてしまう裏には事情があるんだ」と気付かされる出来事が、本当に数え切れないくらいあった、というより、日常生活がその連続だった。そうした生活を共にすることで、異なる民族や宗教を持つ隣人と共存するということの、綺麗ごとだけではなく困難さ

も目の当たりにした。その経験は、研究を行う上で、多様なアクターの視点に立って考えることの重要性を改めて教えてくれた。

一方で、「宗教」や「民族」の問題は彼らにとって重要事項ではあるけれど、生活の場において必ずしも前面に出てくるわけではなかった。「生活を立ち行かせる」という最重要課題を乗り越えていく知恵や工夫、家族や親戚との過干渉なくらい近い関係から学ぶことも多かった。研究テーマを離れたところでも、自分自身の価値観や生き方を見直さす契機を与えてくれた経験であった。

4. 今後の社会貢献

まず、留學生活や調査で得られた知見を、研究という場にとどまらず、社会に向けてアウトプットすることを目指す。昨今、他民族・他宗教を尊重し互いに学び合うこと、他者との共存の重要性が指摘されている。将来的には、世界の文化の多様性と多様な文化がいかに平和的に共存可能なのかという課題について、学術の領域のみならず、社会一般に対しても平易な言葉で発信したいと考える。

さらに、研究を進めることで現地社会と人びとに対する理解を深めながら、フィリピンと日本をつなぐ架け橋になりたいと考える。将来的には現地フィールドワークといった臨地研修を含む教育活動を通して、フィリピンの多様な地域と社会の側面を若い世代に伝えたい。



ムスリムとクリスチャンの親戚が共に参加する
クリスマスパーティー（2013年12月 筆者撮影）



元クリスチャンの母とムスリムであるマラナオ民族
の父を持つ女性の結婚式（2014年2月 筆者撮影）



あるイスラーム改宗者の女性は、クリスチャンである家族の意向でキリスト教の墓地に埋葬された。その埋葬式で説法をするイスラーム改宗者の男性と（2014年2月筆者撮影）